



〔図書紹介〕 井上寿美・笹倉千佳弘編著『子どもを育てない親、親が育てない子ども 妊婦健診を受けなかった母親と子どもへの支援』

著者	田中 欣和
雑誌名	教育科学セミナー
巻	47
ページ	41-41
発行年	2016-03-31
その他のタイトル	[Book Introduction] Hisami Inoue, Chikahiro Sasakura eds., 2015, Mothers Abandoning Their Own Babies, Babies Abandoned by Their Own Mothers : Support for Mothers not Having Received Prenatal Checkups, Support for Babies Born from Such Mothers
URL	http://hdl.handle.net/10112/10005

図書紹介



—井上寿美・笹倉千佳弘編著『子どもを育てない親、親が育てない子ども—妊婦健診を受けなかった母親と子どもへの支援』

生活書院 2015年

田中欣和

「妊婦健診」を受けることは常識と考えられているし、それを受けない人は「飛びこみ出産」を含めて医療関係では「困った人たち」であったようだし、子どもの虐待死の研究では、妊婦健診をちゃんと受けなかった親が虐待死につながる比率は親全体に比べてかなり高いというから社会にとっても「困ったこと」とまず意識されたことは不思議ではない。しかし、「困った人たち」とレッテルをはれば何か改善されるものでもない。

未受診妊産婦はこれまでのところ「医療対象」あるいは「教育対象」として語られることが多かったが、その当事者を「生活者」ととらえ、「困った人」であるより先に「困っている人」と考えるべきではないかというのが、この本の編著者や寄稿者の問題意識となる。

編著者二人は共に関西大学の教育学科及び大学院教育学専攻で学んだ人である。井上寿美さんは現在関西福祉大学准教授、笹倉千佳弘さんは就実短期大学教授である。

妊婦健診を十分受けない人の生活者としての実像、何に困っているのか、まわりの人はどうなのかを把握するには当事者からのきき取りをつみ重ねることは基本的な方法と考えられよう。しかし、この人たちが初対面の研究者に具体的な事情やホンネを語ってくれるとは期待するのもムリである。そこで当事者と多面的に接してきた助産師にその経験を語ってもらう、いわば間接的なきき取りが現実的に可能な方法であった。そこから典型的と思われる6人の事例を引きだし、それぞれに近い例も活用して再構

成を行ったのが第一部である。井上寿美を代表として科学研究費をとってやってきた結果の報告を中心としたシンポジウムには、編著者とは、ちがう経験を重ねてきた人たち、児童相談所長などを経て花園大教授になっていた人と保健所長などを長くつとめて現在大阪府母子保健情報センター長をつとめる人が、子ども虐待に関わる専門家として、さらに自らシングル・マザーであるライターにも体験を語ってもらうという構成だったので、この三人にも寄稿してもらって本書第二部としている。

典型となる6事例では、たとえば有名女子高生である人はまわりの人の自身への期待を意識すると打ちあけることができなかった。中学生の例では妊娠を自覚せず便秘と思っていた。精神障害のある人で外出もできないような落ちこみ方をしていて、さらに「めんどうだから」とか「一々金があるから」行かなかった——といったことが出され、当事者とそのまわりの人たちの思いが具体的に示されている。編著者は妊婦の「自己責任論」を超えて、「社会的養育」の推進と常時支援できる人の確保という方向を提案している。

第2部でシングル・マザーであるライターが自分の体験と重ねつつ指摘したのは、人は『つらさ』を直視できない時「逃げ」を打つものだが、それをただ非難するのではなく、彼女らは「妊娠よりずっと手前で支援を必要としていた」という理解を世に拡げることこそ有用ということであった。(なお両編著者は日教組教研の共同研究者でもある。)

